

阿岐のまほろば

Vol. 23

国分寺を造る「大仕事」

し せき あ き こくぶん じ あと さいじょうちようよし ゆき
史跡安芸国分寺跡(西条町吉行)



もく び
上:木樋の取り上げ作業風景(第14次調査)

左:出土した木樋

てんぴやう しょうむ こっ からん こ
天平13年(741)、聖武天皇は国家鎮護の祈願を目的として、国分寺の造営を国々に命じました。造営にあたり、税金の一部をあてるなど様々な援助を行い、国司にこれを監督させています。

しかし、国分寺は七堂伽藍を備え、地方によってはこれまでにない規模をもつもので、多くの人々とともに資材を必要としたため、6年を経てもなかなか完成しませんでした。このため天平19年、国々の郡司に3年以内に塔と金堂、そして、僧房を完成させることが出来れば、彼らの子孫を代々その地位につけることを約束し、造営を急がせました。とくに、法舍利である金光明経を入れる塔と、本尊仏を安置

する金堂は重要な施設で、法要を行う僧侶が住む僧房も必要でした。ところが、一部の国分寺は工事が進まなかったため、聖武天皇が崩御した天平勝宝8年(756)には、一周忌までにこれらを完成させ、釈迦三尊像も作るよう、再度、促しています。

史跡安芸国分寺跡では、これまでの調査で塔のほか金堂・講堂・軒廊の基壇や、北門とそれに付属する塀などが明らかになっています。今年度行った調査では、寺域の西端を区画する溝と南端の可能性のある板塀跡、さらに、僧房と推定される基壇がそれぞれ検出されました。

安芸国分寺跡の西端そして・・・南端か？

(第14次調査)

安芸国分寺跡の寺域西端を確認する目的で、塔跡から北へ約60m、西へ約40mの地点を調査しました。これまで国分寺の範囲を示すものは、北門とそれに付属する堀跡のみでしたが、この調査で南北に延びる幅約2m、深さ0.6mの溝が検出されたことで、西側の区画施設の位置が確定できました。金堂跡や講堂跡からは西へ約110mの場所にあたります。

また、5月からは安芸国分寺跡の南端を調査する目的で、現在の国分寺仁王門から南へ約30mの地点を調査しました。これまで調査の行われてきた講堂基壇や金堂基壇の規模から推定すると、仁王門付近が中門跡と推定され、南大門はこれより南に存在していた可能性が高いと考えられたためです。調査の結果、一辺が0.5～1mの方形柱穴が、3.5～4m間隔で、東西約60m以上にわたり一列に並んでいました。これらは、柱と柱の間に板をわたした板扉に復元できると考えられます。

当初の目的であった南大門は検出されず、これらが寺域の南端であったかどうかは、さらに広い範囲での調査を必要とします。



寺域の南に並ぶ柱穴列(東から)



寺域西側を区画する溝

寺域西端が確定したことで、東端も金堂跡から約110mの位置にあると仮定すると、少なくとも東西約220m、南北約170mの範囲で寺院が営まれていたことになります。南大門の位置はまだわかりませんが、ほうにちよう(約218m四方)が国分寺の一般的な広さですから、その大きさに少し近づいたと言えるかもしれません。本当に安芸国分寺が方二町、つまり約5haほどの広さをもっていたとしたら、その造営は一世一代の「大仕事」だったに違いありません。

さらに8月からは、この柱穴列を探る目的で、現地事務所の南を調査しました。

その結果、調査区の北端で幅約30cm、残存長約3.2mの木樋が出土しました。木樋とは、丸太をくり抜くか、板を組み合わせて作った古代の排水溝のことをいいます。今回の調査で出土したものは丸太をくりぬき、板と板を削ぎ切りにしてつなぎ合わせた蓋を上(ふた)に被せていました。また、蓋を固定するために釘で打ちつけた痕跡も認められました。

まだ、具体的に年代を決定できる手掛かりがなく、木樋の一部は市道の下に延びているため、詳細は明らかに出来ませんが、今後、保存にむけた処理方法や樹種鑑定、年代測定などを検討中です。

僧侶のすまい (第15次調査)

第9次調査で検出された北門跡とそれに付属する堀跡、第10次調査で検出された軒廊跡との間に建物基壇の一部が確認され、僧房跡ではないかと考えられてきました。僧侶は国分寺ごとに20名の定員が定められ、彼らの住居も必要だったからです。

調査の結果、建物基壇は東西約56mの規模で、端には雨落溝が確認できました。雨落溝とは、長い間建物があるうちに、雨だれによって地表が深く削られたものです。また、基壇南端には瓦を打ち砕いたものをタイルのように並べていました。瓦として使えなくなったらすぐ捨ててしまうのではなく、こうしてリサイクルしていたようです。

講堂から北へ延びた軒廊はこの基壇の中央に取り付いていましたが、講堂と軒廊の間にはかなりの高低差があることから、行き来を楽にするために階段が取り付けられていたと思われます。

調査では確認できませんでしたが、建物は基壇の上に盛土を行って礎石を並べ、そこに柱を立てた

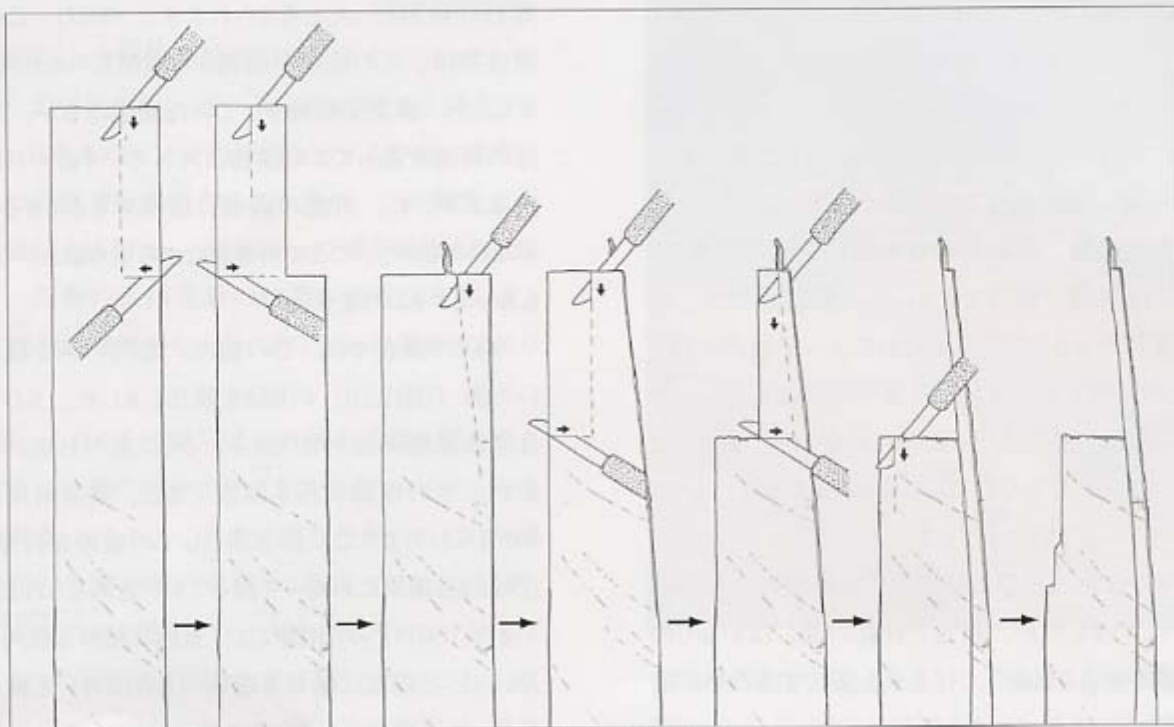
礎石立建物だったと考えられます。つまり、この基壇建物は、その位置や規模から僧房だったと言えるでしょう。講堂で勉強をしていた僧侶たちが、屋根付の軒廊を通してこの建物に入っていく姿が目浮かぶようです。軒廊の両側には視界をさえぎるものがないことから、ここで外を見ながら立ち話ということもあったかもしれません。

今回の調査では、この他に、北門の南を巡っていた溝 (SD220) の続きを検出しました。SD220は建物基壇東端を取り囲み、さらに東へと続いています。土の堆積状況を観察すると、溝は何度も掘りかえられたようで、排水溝としての重要な役割を、比較的長期間にわたって担っていたと考えられます。

また、SD220の南側には、東西に延びる柵列 (SA604) と南北に延びる柵列 (SA606) も検出されました。残念ながら、この柵列については、年代や用途も不明なままで、さらに広い範囲での調査を待つことになりました。



古代のシュレッダー -第12次調査出土天平勝寶二年銘木簡の「捨て方」-



木簡切断(廃棄)の手順

第12次調査で出土した天平勝寶二年(750)銘の木簡(文化財センター報21参照)は、これまで謎だった国分寺造営について多くのヒントを与えてくれますが、その後の研究で新たな事実が明らかになりました。

この木簡は、両端が残っていませんが、細かく観察すると、上端は明らかに捨てる直前に施された加工痕が残っています。復元すると2尺(約60cm)以上となる木簡を捨てるにあたり、小刀を用いて細断していると考えられます。まず、縦方向に小刀を入れ、次に横方向に小刀で刻目をつけて折り取るという作業を5回以上繰り返しているようです。しかも、この折り取り作業は無計画ではなく、文節近くを中心に行なわれました。切断によって半裁された表面の「四」と裏面の「嶋」からは、四斗送られた品物の名前と「付」の後に続く人名(?)を消すために、切断が行われたことを暗示しています。

木簡に書かれた内容が、誤用されないように細か

く切り取って文書を始末したことが、この人工的な加工痕の正体で、シュレッダーの役割だといえるでしょう。このような捨て方は、地方の重要な内容が記された木簡のみに行われます。

また、この木簡は、送り状として使った後、習書(役人や僧侶が字を練習するために書いた落書きのようなもの)を行っています。本当に使えなくなるまで、ものを出来るだけ大切に使う姿勢は現代でも見習う必要があります。

【文責：関廣】

(財) 東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿 岐 の ま ほ ろ ば Vol.23

発行日 2002(平成14)年3月29日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター
発行 東広島市西条町大字馬木541-1
TEL 0824-25-3880 〒739-0033

印刷 今谷印刷株式会社
東広島市西条町寺家6608番地